

# 草の芽句会たより

NO,103  
29, 3, 2

孫走る桜待たるる広場かな  
落椿集めてありしベンチかな

範子

ピンクパンツの幼かわいい春吟行  
山茶花の径に散り敷く落花かな

節子

寺裏に目白来てゐる早桜  
境内のテントに飛んで初穂かな

文子

青空の先まで咲ける藪椿  
城山の鳩追ふ孫や草青む

貞子

白梅のつんつん伸びる青い空  
雨止みて城山芽吹くものばかり

禮子

春を待つ心に見返り坂上る  
仏縁の話してをる水仙花

剋子

三月やはればれとあり讃岐富士  
かがまりて触れたき小花いぬふぐり

純子

花びらも混じりし菜飯仏前へ  
茶屋主偲ぶ床几に藪椿

貞

出席者 吉崎 大黒 氏家 馬場 川原 小山  
投句者 森 真鍋

城山は芽吹き季節、素晴らしいお天気のせいかな人が多い。見返り坂には若い二人連れの姿も。春が近付くと人は足取りが軽くなる？枝先に花をつけた桜を見つけ大喜び。「早から咲いとるで！」お花見を控えてか城山は枯草が除かれ虚子の句碑が一段と存在感を見せている。「こんなに綺麗に掃かれたお城はめつたに見られんな」「掃除の人は大変だったやろな」主婦連の実感。梢の轉りにも負けない声でお喋りをしながら二の丸跡へ。遠く山々には霞がかかり、目の前にはゆつたりと裾野を広げて飯野山、眼下には青く輝く瀬戸の海。見上げる石垣の先はどこまでも蒼い空。両手を広げて思わず深呼吸。用意万端整えて城山は花を待っている。

